

宮城県保健環境センター  
課題評価結果報告書

平成28年3月11日

宮城県保健環境センター評価委員会



## 目 次

1 宮城県保健環境センター評価委員会開催状況 .....	1
2 評価委員 .....	1
3 評価対象課題 .....	1
4 評価方法 .....	2
5 評価結果 .....	3

(参考資料)

平成27年度課題評価調書

## 1 宮城県保健環境センター評価委員会開催状況

- (1) 平成27年度第1回評価委員会  
平成27年11月6日(金) 午後1時30分から午後4時30分まで  
宮城県保健環境センター大会議室
- (2) 平成27年度第2回評価委員会  
平成28年2月12日(金) 午後1時30分から午後4時まで  
宮城県保健環境センター大会議室

## 2 評価委員

	氏名	所属・職名
1	秋山 和夫	一般財団法人宮城県公衆衛生協会理事
2	加藤 徹	NPO法人あぐりねっと21理事長
3	白川 愛子	宮城大学食産業学部フードビジネス学科准教授
○ 4	多田 千佳	東北大学農学研究科環境システム生物学分野准教授
5	福島 美智子	石巻専修大学理工学部食環境学科教授
6	村田 功	東北大学大学院環境科学研究科准教授
◎ 7	山田 一裕	東北工業大学工学部環境エネルギー学科教授

50音順 ◎印は委員長 ○印は副委員長

## 3 評価対象課題（全て事前評価）

整理番号	研究区分	担当部名	研究課題名	研究期間
1	経常研究	微生物部	野生動物及び豚のE型肝炎ウイルス浸淫状況とリスク評価	H28-29
2	経常研究	生活化学部	機器分析法による下痢生貝毒の分析法の確立と適応性の検証	H28-29
3	経常研究	大気環境部	宮城県におけるPM2.5中のレボグルコサンの解析	H28-30
4	経常研究	水環境部	底層溶存酸素量に係る湖沼への類型指定適用の検討	H28-29

#### 4 評価方法

平成27年度第1回評価委員会では、事前配布された課題評価調書等に基づき、保健環境センターから各課題に関する説明を受け、質疑応答を行った上で各評価委員が評価を行いました。

第2回評価委員会では、各評価委員の評価結果を基にとりまとめた課題評価結果報告書の内容について審議しました。

なお、評価項目と総合評価基準は以下のとおりです。

##### 評価項目

事前評価	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 課題の重要性</li><li>・ 課題を県が行う必要性</li><li>・ 計画の妥当性</li><li>・ 計画の先見性・独創性</li><li>・ 研究資源の妥当性</li><li>・ 成果及びその波及効果</li></ul>
------	---

##### 総合評価基準

評価	事前評価
AA	計画は優れている
A	計画は妥当である
B	計画は概ね妥当である
C	計画の一部に課題がある
D	計画の見直しが必要である

## 5 評価結果

整理番号	1	研究区分	経常研究	研究期間	平成28～29年度
研究課題名	野生動物及び豚のE型肝炎ウイルス浸淫状況とリスク評価				
総合評価結果	A	A（6人）・B（1人）			
総合評価意見	<p>全国的にE型肝炎の発生が増加し、豚肉の生食目的での販売等が規制された一方で、イノシシやシカ等の野生動物肉の喫食の増加が見込まれる現時点において、野生動物及び豚のE型肝炎ウイルスの浸淫状況を把握することは重要である。本研究による成果は、食肉等を原因とするE型肝炎発生リスク及び予防対策を県民に啓発する上で有用なデータとなるだけでなく、医療現場への情報提供によるE型肝炎の的確な予防・診断の根拠となる。また、野生動物の肉の安全な利用に係る情報を提供することで野生動物肉の利用拡大については農業被害の軽減及び生態系の保全にもつながり得るものである。</p> <p>ただし、E型肝炎ウイルスの浸淫状況を把握し、汚染ルートの解明に資するという研究目的が達成されるよう、事前調査を十分に行い、検体となる豚等の産地等を考慮し、計画的にサンプリングする必要がある。また、サンプリング数については、過去の検出率を踏まえ、統計的に有意なデータが得られるよう、調査期間の延長も含め検討する必要がある。</p>				

整理番号	2	研究区分	経常研究	研究期間	平成28～29年度
研究課題名	機器分析法による下痢性貝毒の分析法の確立と適応性の検証				
総合評価結果	A	AA（1人）・A（4人）・B（2人）			
総合評価意見	<p>下痢性貝毒の分析法がマウス毒性試験法から機器分析法に移行される今、下痢性貝毒の機器分析法を確立し、さらにその分析法について自然に毒化した二枚貝への適応性を確認し検査体制を新たに構築することは、水産県である県の試験研究機関として、主要産品である二枚貝の安全性を確保するために緊急かつ重要な課題である。</p> <p>緊急性を要する課題であることから、他県及び県の関係研究機関とも連携し、先行して行われた解析事例を収集・分析の上、効率良く進めるとともに、ホタテガイだけでなく、他の二枚貝における分析法の確立についても検討されたい。</p>				

整理番号	3	研究区分	経常研究	研究期間	平成28～30年度
研究課題名	宮城県におけるPM2.5中のレボグルコサンの解析				
総合評価結果	B	A(3人)・B(2人)・C(2人)			
総合評価意見	<p>全国的に環境基準の達成状況が思わしくないPM2.5について、これまでに実施してきた成分分析に加え、バイオマス燃焼の指標となるレボグルコサンの解析を行うことは、PM2.5の発生源の解明などPM2.5対策のための有用な基礎資料となるほか、火力発電所の周辺における調査結果についても、貴重なデータとなることが期待される。また、従来PM2.5の質量濃度測定を行っている県が大気汚染物質対策に係る分析技術を向上させ、詳細な構成成分の把握に努めることは意義がある。</p> <p>研究を行うにあたっては、サンプリング時の気象条件や野焼きの状況、レボグルコサンの発生特性等を考慮した上で、調査方法及びその成果の活用方法を明確にして実施する必要がある。また、PM2.5に対する懸念が高まっていることから、県民に対する調査結果の具体的な情報提供方法について検討する必要がある。</p>				

整理番号	4	研究区分	経常研究	研究期間	平成28～29年度
研究課題名	底層溶存酸素量に係る湖沼への類型指定適用の検討				
総合評価結果	B	A(3人)・B(2人)・C(2人)			
総合評価意見	<p>現時点での底層溶存酸素量を把握しておくことは、今後底層溶存酸素量が環境基準に追加された際に、類型指定等の対応の迅速化が図られ、水環境の保全対策に寄与する。</p> <p>ただし、水生生物の生息状況等の水域特性等の調査は、文献調査に限らず、水生生物の専門家の協力等により実地で行うことを検討されたい。また、本研究による底層溶存酸素量の調査は、水生生物の生息環境の保全を検討する上で有用な基礎資料となることから、県民の環境保全に対する意識が高まるよう、調査結果の発信方法についても併せて検討されたい。</p>				